

清く雅やかな

世界を求めて

—江戸時代後期の女性画家たち—

実践女子大学香雪記念資料館



実践女子大学香雪記念資料館では開館以来、女性画家の作品の収集・調査・研究を重ねてまいりました。あまり知られていませんが、近代以前、つまり江戸時代にも多くの女性が絵筆を執っていました。しかも、実にさまざまな立場の女性たちが絵を描いています。

今回ご紹介するのは、江戸時代中期以降盛んに描かれるようになる、日本の文人画風絵画のいわば女性版です。耳慣れない名前も含まれているかもしれませんが、いずれも男性が描く作品に勝るとも劣らぬ作品ばかりです。一名「南画」とも呼ばれる、その画風の大成者・池大雅の妻・玉瀾をはじめ、谷文晁の妻や妹など、絵師であった夫や父や兄に家庭内で絵の手ほどきを受けた女性かなりの数を占めています。

その一方で、男性に従いつつも、依存しない女性たちも出てきます。そうした女性の代表格が、江馬細香と張（梁川）紅蘭です。ふたりはともに現在の岐阜県大垣市の出身で、その画技と生涯に魅せられて、当館ではふたりの作品を随分と調査させていただきました。今回はそのうちのいくつかを特別にお借りしています。ほとんど岐阜県以外では初公開となる作品です。

末筆ながら、貴重な作品を快くお貸しいただき、本展覧会に花を添えていただきました、ご所蔵者各位に心より御礼申し上げます。

令和 3 年 9 月
実践女子大学香雪記念資料館
館長 仲町 啓子

謝 辞

本展覧会の開催および本パンフレットを作成するにあたり、貴重な作品のお貸し出し、写真のご提供など、多くの方々にご高配を賜りました。またここにお名前を記すことが出来なかった方々を含めまして、厚く御礼申し上げます。(50 音順、敬称略)

大垣市奥の細道むすびの地記念館
大垣市郷土館
岐阜市歴史博物館

中島 雄彦
山崎 和真

凡 例

- ・本パンフレットは実践女子大学香雪記念資料館で開催した企画展「清く雅やかな世界を求めて—江戸時代後期の女性画家たち—」(2021 年 9 月 20 日～10 月 30 日)に際し、発行したものです。
- ・所蔵先の記載がないものはすべて実践女子大学香雪記念資料館蔵です。
- ・執筆者は以下のとおりです。なお、編集は主に田所泰(実践女子大学香雪記念資料館学芸員)が担当し、鈴木美有(同事務職員)、河本理緒(同臨時職員)、富田佳音(同臨時職員)が補助しました。
- (N)：仲町 啓子(実践女子大学香雪記念資料館 館長)
- (T)：田所 泰(実践女子大学香雪記念資料館 学芸員)

表紙画像：江馬細香《四季竹之図》より「春」 大垣市奥の細道むすびの地記念館蔵
裏表紙画像：張（梁川）紅蘭《群蝶図》(部分) 個人蔵

第 1 章

絵師の妻や娘たち

天下泰平となった江戸時代。文化の担い手が公家や武家から町人へと広がり、華やかなる発展を遂げる一方で、女性たちは儒教的な価値観の下、子を産み育て、家庭を守るべき存在として見なされるようになります。そんななかにあって、絵筆を執った女性たちがいました。17 世紀に活躍した清原雪信^{きよはらゆきのぶ}（1643-82）が良く知られるところですが、18 世紀には南画の発展とともに、絵師や知識人であった父や夫に従い、南画を得意とする女性たちが続々と登場します。さまざまな制限を受けながらも、彼女たちは「描く」ことを選択したのです。(T)

No.1

ぎょらく ず 漁楽図

とくやま いけ ぎょくらん
徳山（池）玉瀾（1727/8-1784）

18 世紀後半
紙本墨画淡彩
1 幅
20.2 × 20.1cm
款記「玉瀾」
印章「玉」「瀾」白文方印・連印、「松風」朱文橢円印・遊印

四手網を仕掛け、水辺の木陰でのんびりと獲物を待つひとりの人物。対岸に目を向ければ遙か遠くまで山々が連なり、ゆったりとした時の流れを感じさせます。中国では古くから、漁夫は自然のなかで悠々自適な生活を送る理想的な人物像として、絵画や詩の題材とされてきました。日本でも特に南画家に好まれ、多くの作例が残されています。

徳山（池）玉瀾は南画を大成した池大雅（1723-76）の妻で、名は町。玉瀾、松風などと号しました。「玉瀾」という雅号は、柳澤淇園（1704-58）より贈られたものだといいます。画は夫・大雅に学び、大雅風の南画を得意としました。(T)



No.2

江村晩晴図

谷文晁（1763-1840）

雪景楊柳図

林（谷）幹々（1770-99）

江村晩晴図

寛政7年（1795）

16.5 × 18.0cm

款記「江村晩晴 乙卯杪冬寫於寫山樓
文晁」

印章「文」「晁」白文方印・連印



谷文晁《江村晩晴図》

雪景楊柳図

18世紀後半

17.7 × 18.0cm

款記「林氏幹々」

印章「幹」「幹」白文方印・連印



林（谷）幹々《雪景楊柳図》

谷文晁とその妻・幹々それぞれの描いた山水図を1幅に合装した作品。「江村晩晴」と題された文晁画には、湿潤な空気感ただよう水村の情景が描かれています。対する幹々の作では、白く雪に覆われた山々を望むように、水辺に無人の四阿と葉の落ちた柳が描かれ、水面では一艘の小舟が波に揺られています。

幹々は江戸に生まれ、姓を林、字を翠蘭といいました。16歳の折にいとこである文晁と結婚し、画を学んだとされています。山水、人物、花鳥など多彩な画題に筆を執ったとされていますが、30歳という若さで亡くなりました。(T)

No.3

清溪垂釣図

奥田（大島）来禽（生没年不詳）

18世紀後半

紙本墨画淡彩

1幅

25.3 × 14.4cm

款記「来禽」

印章「来」「禽」朱文方印・連印



高く聳える山々に囲まれた湖で、ひとり小舟を出し、釣り糸を垂れる人物。俗世を離れた悠々自適な姿は、徳山（池）玉瀾の《漁楽図》（No.1）同様、文人たちが理想とした境地を描いたものでしょう。墨を基調に淡彩が施され、瑞々しい画面に仕上げられています。

奥田（大島）来禽は京都の町屋に生まれ、名を蘿井といい、来禽と号しました。篆刻家で書画や漢詩にも優れた高芙蓉（1722-84）と結婚し、夫・芙蓉から本格的に南画を学びました。(T)

No.4

唐美人図

香川氷仙（？-1815）

18世紀後半～19世紀前半

絹本墨画

1幅

18.6 × 17.4cm

款記「氷仙寫」

印章「苑」「葵」朱文方印・連印



華奢なからだに流れるような衣をまとい、すっと立つ女性。手には紙のようなものを垂れ懸けた棒を持ち、軽く頭を俯けています。日本では18世紀前半頃より、流派を越えて中国風俗の女性像、すなわち唐美人図が広く描かれるようになり、池大雅ら南画家たちも多く筆を執っています。本作もそうした作例のひとつで、中国・唐の女性詩人・薛濤を描いたものと考えられています。

作者の香川氷仙は名を苑葵（園葵）といい、大坂で活動しました。南画家・八木巽所（1771-1836）の妻で、白描の美人図を得意とし、当時はかなり高い評価を受けていました。(T)

No.5

墨菊図

亀井少棨（1798-1857）

19世紀

紙本墨画

1幅

117.0 × 28.0cm

款記「病懶不栽菊 重陽徒永歎 把杯無□醉 自画一枝看 少棨併題」

印章「龜友士」白文方印、「少棨女史」白文方印、「窈窕」白文方印・関防印

勢いのある筆遣いで、大胆に描かれた菊の花。茎に連なる葉っぱが小振りなため、ひと際その大きさが印象的です。賛として認められた五言絶句には病気で菊を植えることを怠り、重陽の節句に菊を愛でられず残念であったため、自ら描いたという内容が詠われています。

亀井少棨は福岡藩の儒医であった亀井南冥（1743-1814）を祖父に、南冥の跡を継いでその学業を大成させた亀井昭陽（1773-1836）を父にもち、幼い頃よりその薫陶を受け、漢詩文や書画をよくしました。夫の三苦雷首（1789-1852）は父・昭陽の門人で、結婚後は亀井姓を名乗り、医業を継いでいます。(T)



第2章

自立した絵師となった女性たち

江戸時代も後期になると、男性に指導を受けたり、ともに旅をしたり、ネットワークに参加したりしながら、ひとりの自立した絵師として活動する女性たちが現れてきます。その代表格といえるのが江馬細香と張（梁川）紅蘭です。ふたりはともに美濃国大垣藩の生まれで、同地の知識人らと結成した詩社・白鷗社などをとおして親しく交流をしていました。また、細香と交流のあった林珮芳は、中国山水画に学んだ本格的な山水画を遺しています。

ここでは彼女たち3人に焦点を当て、江戸時代後期に花開いた女性南画家の描く世界を紹介します。(T)

江馬細香

江馬細香は名を多保、裊、嫺、猗々といい、大垣藩医・江馬蘭斎（1747-1838）の娘として生まれました。「細香」は字で、別に湘夢とも号しています。はじめ京都の画僧・玉潁に絵を学び、その後父・蘭斎を介して頼山陽（1780-1832）に教えを受けるようになりました。細香は山陽をとおして浦上春琴（1779-1846）をはじめとする多くの知識人らと交流し、詩書画の研鑽を重ねます。晩年には目を患ったり体調を崩したりしながらも、75歳で没するまで旺盛な制作活動を続けました。(T)



No.6

さんすい ず 山水図

え ま さいこう
江馬細香（1787-1861）

嘉永6年（1853）
紙本墨画
1幅
106.8 × 29.0cm
款記「癸丑秋月 細香」
印章「江女裏」白文方印、「細香居士」朱文方印

水分をたっぷりと含んだ墨点を重ね、湿潤な空気感を表現した遠景の高山。その手前に配された中景の山は、細かく波打つような墨線で皴が施され、ごつごつとした岩肌の質感が表現されています。前景には柳などの樹木が並ぶ岸辺が配され、水面に架かる小橋を渡りくる人物を迎えています。

細香は晩年になって山水画を多く手がけるようになりますが、67歳のときに描いた本作からは、いまだあれこれと模索するようすが窺えます。(T)



No.7

あきさんすい ず 秋山水図

え ま さいこう
江馬細香（1787-1861）

安政6年（1859）
絹本墨画
1幅
141.0 × 30.5cm
款記「相對談何事 泉流坐鳴 琮琤雙耳潔 是洗世塵聲 己未秋日 七十三嫺 細香併題」
印章「江馬嬢」朱文方印、「細香居士」白文方印、「結縁翰墨」白文方印・関防印
大垣市奥の細道むすびの地記念館蔵

立ち込める雲間にどっしりと聳える山々。その間を縫って落ちる滝の流れは、画面右下の水辺へと続くのでしょうか。小高い崖の上には四阿が設けられ、ふたりの人物が向かい合って腰を下ろしています。細香が本作に添えた五言絶句には、「向かい合って何も語らず、ただ水の流れる音だけが聞こえる。さわやかなその響きは耳に心地よく、世俗の喧騒や雑事を忘れさせてくれる」といったことが詠まれています。(T)





冬

夏

秋

春

No.8

四季竹之図

江馬細香（1787-1861）

紙本墨画

二曲一双

各 130.0 × 54.2cm

款記

春「竹月蕭騒憶寫真 千年邈矣李夫人 閨窓掃盡無塵點 一瓣名香要手親 細香」

夏「南風作竹 細香」

秋「参差不律猶含粉 縹渺輕明捻帶霜 細香」

冬「庭竹縱横玉壓垂 夜來快雪始晴時 朝暉一道紅料遠 扶起簷間令起枝 細香」

印章 各「江女裏」白文方印、「細香居士」朱文方印、「結縁翰墨」白文方印・関防印

大垣市奥の細道むすびの地記念館蔵

「細香」という字は唐の詩人・杜甫の詩に由来するもので、竹の香りを意味します。その字のとおり、細香はとりわけ墨竹画を得意とし、近代に入ってもなお、墨竹画の名手として知られていました。

本作は四季折々の竹の姿を描いた作品で、右隻には春と秋、左隻には夏と冬の竹がそれぞれ表されています。各図に添えられた漢詩には、月光に照らされ風にそよぐ竹の姿や、温かな風に吹かれてすすくと伸びる竹、霜に覆われた竹や、射し込みはじめた朝日が雪を溶かし、小枝をもたげた竹の姿などが詠まれています。(T)

No.9

蘭図

江馬細香（1787-1861）

文政 11 年（1828）

紙本墨画

二曲一隻

各 29.0 × 64.8cm

右図

款記「戊子仲夏寫 細香」

印章「江馬細香」白文方印

左図

款記「戊子蒲月寫 細香」

印章「江馬」「多保」白文方印・連印

風炉先屏風として仕立てられた細香 42 歳のときの作。

右扇には黒く表面の滑らかな石と笹竹、垂直に伸びる蘭が描かれ、左扇にはごつごつとした白っぽい石と斜めに伸びる蘭が表されています。また、右扇の蘭と笹竹と石が閉じた円環を思わせる安定した構図で描かれるのに対して、左扇の石と蘭は直線的に配され、開放感のある構図が採られています。

細香は『芥子園画伝』などの図譜からも積極的に中国絵画を学んでおり、本作の笹竹にも、『芥子園画伝』に通じる表現が認められます。(T)



No.10

蘭竹図

江馬細香（1787-1861）

安政元年（1854）

紙本墨画

1 基

38.0 × 55.5cm

款記「衰年出門少 病目興書疎 独有毛錐子

依然不棄余 甲寅晩冬寫併題 細香」

印章「江馬嬢々」朱文方印、「細香居士」白文方印、

「醉墨」朱文長方印・関防印



斜めに横切る土坡の頂から覆いかぶさるように立ち上がる岩と、その根元に並ぶ苔むした石。それらの陰に隠れながらも、葉を勢いよく伸ばして咲く蘭の花が描かれています。

本作は細香 68 歳のときの作。賛には年老いて外出も少なくなり、目を悪くして書物への関心も薄れてきたが、筆のみが依然として私を見捨てずにいる、といった内容の五言絶句が認められています。

なお、衝立に仕立てられた本作の裏面には、細香と同じく美濃で活躍した村瀬秋水（1794-1876）の山水図が描かれています。(T)

No.11

つきがせ きしょう

月瀬記勝

さいとうせつどう

斎藤拙堂（1797-1865）著

みやざきせいこく

宮崎青谷（1811-66）画

嘉永4年（1851）序・跋

香雲亭藏板

木版

乾・坤2冊

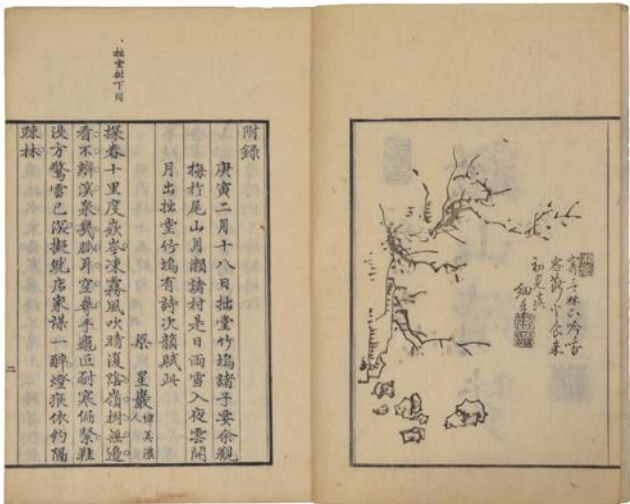
各 25.5 × 17.3cm

江馬細香画

款記「寄言林下吟哦客 □火食来初見真 細香」

印章「多保」朱文方印、「江馬氏女」朱文方印、

「湘夢」白文長方印・関防印



『月瀬記勝』坤巻

本書は伊勢・津藩の儒学者である斎藤拙堂が刊行した、全編漢詩文から成る月ヶ瀬旅行記。文政13年（1830）に梁川星巖、張（梁川）紅蘭夫妻らと奈良の月ヶ瀬へ観梅に出かけた折の紀行文に、同道した儒者で画家の宮崎青谷が描く月ヶ瀬の景を添え、さらに全国の友人たちから集めた梅の詩を付録として合わせ、嘉永5年（1852）に刊行されました。

細香の梅図は本書坤巻の冒頭に掲載されたもので、岩陰から伸びる枝に淡墨を点じることで梅花が表されています。（T）

No.12

しくん し かん

四君子卷

え まさいこう

江馬細香（1787-1861）

安政5年（1858）

紙本墨画淡彩

1巻

29.2 × 947.2cm

款記「筆海難済得 墨波元渺茫 手心不相應 至竟恨無航 戊午晚秋為 竹

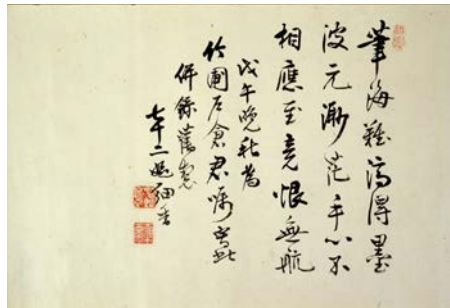
圃戸倉君囑寫此 併録舊製 七十二姬細香」

印章「江馬裊」白文方印、「湘夢」白文方印、「綴風」朱文橢円印・関防印

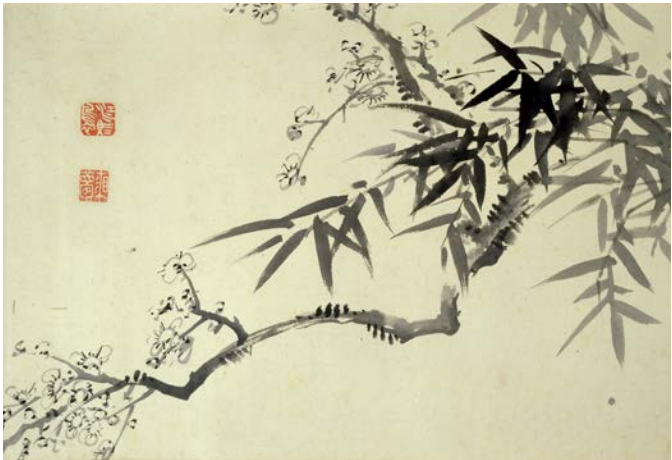


8

四君子とは梅、蘭、菊、竹のことで、いずれも高潔な君子のようであるとして貴ばれました。本作は細香が72歳の折に、美濃の漢詩人・戸倉竹圃（1832-81）の求めに応じて描いたものです。当初は細香の画と詩の12点のみでしたが、細香の没後に岡本黄石（1811-98）ら7人の詩書8点が寄せられ、現在のかたちとなりました。細香は本作に認めた詩のなかで画技の未熟さを憂っていますが、描かれた四君子はどれも墨の濃淡や潤筆・渴筆を使い分けながら、伸びやかに表されています。（T）



12



2



1



4



3



7



6



5



11

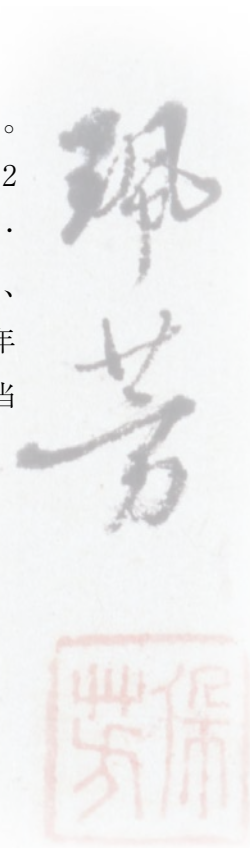


10



9

林珮芳は紀伊藩の地主である小林栄秀の三女として生まれました。名を蝶、字を恋花といい、珮芳（はじめ佩芳）と号しました。文政2年（1819）に医者で漢学者の東夢亭（1791-1849）と結婚。画は伊勢・寂照寺の画僧・月僊（1741-1809）の墨蘭図などを手本に学びはじめ、地元の絵師・小橋香村にも教えを受けたといひます。その後弘化3年（1846）に伊勢を訪れた長崎の画僧・鐵翁（1797-1877）を通じて、当時最新の中国山水画に触れ、その画風を大きく発展させました。(T)



No.13

さんすい ず かん

山水図巻

はやしはいほう

林珮芳（1799-1879）

安政4年（1857）

紙本墨画淡彩

1巻

26.6 × 293.5cm

款記「丁巳初秋写 珮芳」

印章「珮芳」朱文方印

題：斎藤拙堂（1797-1865）筆

「貞筠拙箭 潤壁懷山 録王融詩句 題佩芳女史山水卷 拙堂隱士謙」

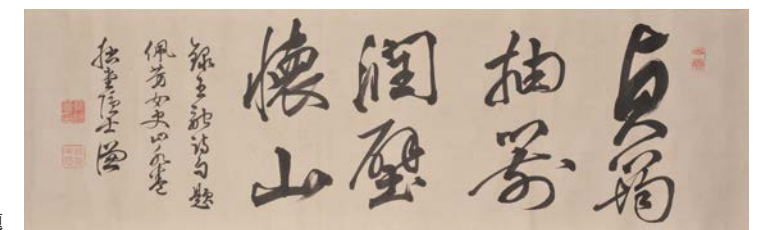
印章「斎藤兼印」白文方印、「拙堂半隱」朱文方印、「古香」朱文長方印・関防印

跋：小野湖山（1814-1910）筆

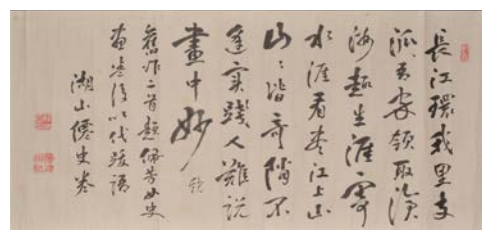
「長江環我里 支派繞吾家 領取濱洲趣 生涯寄水涯 看盡江上山 山々皆奇隋 不逢實踐人 難説畫中妙 舊作二首 題佩芳女史畫卷後 以代跋語 湖山僊史卷」

印章「横山卷印」白文方印、「風月相知」朱文方印、「彫蟲」白文橢圓印・関防印

山水の景は、中景の山並みから遙か左奥に遠山を望む構図から始まり、三艘の帆掛け舟、岩陰で立ち話をするふたりの高士、はためく酒旗、松の樹陰で談笑する高士、舟上の漁夫などに引き続き、紅葉した木々の奥に屋敷が現れます。本作は山間に閑居する文人たちの理想を表しています。中国清代の山水画などを学んだ成果が盛り込まれ、清新な色感とあいまってすがすがしい小世界を作り上げています。59歳の時の作。題と跋は、それぞれ著名な儒者・斎藤拙堂と漢詩人・小野湖山が一女性のために認めています。(N)



題



跋

張（梁川）紅蘭

張（梁川）紅蘭は大垣藩主より苗字帯刀を許された郷土格の稲津長好の娘として生まれ、のちに張氏と称しました。14歳のときに再従兄である梁川星巖（1789-1858）の塾に入って漢詩を学び、文政3年（1820）に星巖と結婚。文政5年から9年にかけて夫婦で西国各地を遊歴し、その後も京都、江戸に滞在して多くの知識人らと交流しました。安政の大獄の折には、勤王の志士に慕われた亡夫の代わりに投獄されます。晩年は私塾を開いて詩文を教えながら暮らしました。(T)



No.14
さんすい ず
山水図
ちょう やながわ こうらん
張（梁川）紅蘭（1804-79）

明治11年（1878）
純本墨画
1幅
141.3 × 52.4cm
款記「木落中峯露石臺 天紳百丈畫雲間 山人對話寒窓本 驟雨旋風入座来 七十五嫗紅蘭詩畫」
印章「張氏景婉」白文方印、「道華」朱文方印、「黄裳」朱文長方印・遊印
岐阜市歴史博物館蔵

賛は『紅蘭遺稿』所載の七言絶句で（ただし3句目の「本」は遺稿では「下」）、「百丈（約300m）もの滝が雲間から落下し、山人（山中に隠棲する人）ふたりが窓辺で話をしていると、滝のしぶきが風に吹かれて驟雨のように室内に入ってくる」といった内容です。滝壺に近い茅屋の中にふたりの人物が見えます。量感のある堂々たる山容が圧巻です。向かって右の水景が奥行きを生み、濃墨の木々が画面を引き締めています。紅蘭の山水画の集大成とも呼ぶべき傑作です。(N)

No.15
り かんうつしたけ ず
李衍写竹図
ちょう やながわ こうらん
張（梁川）紅蘭（1804-79）

19世紀前半
紙本墨画
1幅
174.2 × 71.3cm
款記「張氏景姚摸」
印章「梁」「張」朱文方印・連印
※原本（李衍画）の款記「大徳庚子秋七月李衍」
印章「息齋」朱文方印、「李衍仲賓」白文方印（二顆ともに描印）

李衍（1245-1320）は画竹を得意とする中国・元の文人画家で、日本でも画名が高く、作品がいくつか伝来し、著書の『竹譜詳録』も宝暦6年（1756）に和刻が出されています。江戸で活躍した高久靄厓（1796-1843）に同じ李衍画に拠ったと思われる作品（米・インディアナポリス美術館蔵）があり、当時原本となった李衍画は江戸にあって、紅蘭はその地で描いたものと推定されます。画風・署名・印章からもほぼ30代（1830年代）の作と判断できます。(N)



No.16
らんちくこん き ず
蘭竹昆喜図
ちょう やながわ こうらん ひ ねたいざん
張（梁川）紅蘭（1804-79）・日根対山（1813-69）画、
らい み きさぶろう
頼三樹三郎（1825-59）賛

19世紀中頃
紙本墨画
1幅
132.9 × 58.5cm
張（梁川）紅蘭画
款記「紅蘭寫竹」
印章「張氏景婉」白文方印、「道華」朱文方印
日根対山画
款記「對山人 贅野蛾蜻蜓」
印章「日長」朱文方印、「小年父」白文方印
頼三樹三郎賛
賛「空山無人 水流花開」
印章「頼」・「醕」朱文方印・連印
大垣市奥の細道むすびの地記念館蔵

弘化3年（1845）末に移り住んだ京都で夫・星巖が親交を結んだ勤王家の日根対山と頼三樹三郎との合作です。風にそよぐ竹を紅蘭が、蛾と蜻蜓とおそらく蘭を日根対山が描き、頼三樹三郎が賛を添えています。画と賛の軽快な筆致が潑刺とした画面を生み出しています。3人がともに京都にいてかつ政情不安が激化する以前とすると、嘉永2年（1849）以降の数年あるいは3、4年の作ではないかと推定されます。紅蘭40代末から50代初めの作です。(N)



No.17

ぼくばい ず
墨梅図

ちょう やながわ こうらん
張（梁川）紅蘭（1804-79）

明治 5 年（1872）
紙本墨画
1 幅
132.0 × 52.6cm
款記「五里十里香世界　萬家千家雪樓臺　東君税駕何其早　臘月初頭花盡開 紅蘭張氏詩畫」
印章「張氏景婉」白文方印、「道華」朱文方印、「黃裳」朱文長方印・遊印

明治 5 年（1872）、星巖没後の京都時代の作です。梅樹の伸びやかな動きによって、絶妙に「余白」が生み出されています。下部には新春を寿ぐ靈芝が見えます。賛の七言絶句は、弘化 2 年（1844）12 月江戸に滞在していた紅蘭が、星巖の弟子・小野湖山（1814-1910）らと出かけた梅見を詠んだ一首。一面に漂う梅の香りと雪のように花びらが家々に散るさまを目の当たりにして、臘月（12 月）だというのに東君（春の神）が何と早く訪れたことかと詠っています。(N)



No.18

しゅう き お ちょう ず
秋卉舞蝶図

ちょう やながわ こうらん
張（梁川）紅蘭（1804-79）

天保 5 年（1834）
絹本着色
1 幅
124.1 × 26.4cm
款記「張氏紅蘭」
印章「梁」「張」朱文方印・連印
賛：梁川星巖（1789-1858）筆
「青棠姪姁能鐫忿　丹棘連娟解忘憂　一種人間好花草　西風腸斷不勝秋　甲午正陽月録舊製 為藤井子開賢契　梁緯」
印章「梁緯」白文方印、「公圖」朱文方印

当時夫妻は、居を構えていた江戸南八丁堀の家が天保の大火で類焼したため、親しくしていた水戸藩士の口利きで向島の水戸藩下屋敷内に仮寓していました。この絵を進呈された藤井竹外（1807-66、字・子開）も、その時に世話をしたひとりかと思われます。全体に薄墨を刷き、薄暗がりの中から秋海棠の姿を浮かび上がらせ、その花に引き寄せられるように 2 匹の華麗な蝶が添えられています。薄紅の花や茎は妖艶とも言える美しさを放っています。紅蘭 31 歳の作。(N)



No.19-1

ぐんちょう ず
群蝶図

ちょう やながわ こうらん
張（梁川）紅蘭（1804-79）

文政 7 年（1824）2 月 13 日
絹本着色
1 幅
113.8 × 41.7cm
款記「政甲花朝前二日張氏景姚併題以呈蝶夢老兄 盟臺下　粲齒」
印章「張氏景姚」白文方印、「月華女史」朱文方印、「紅」「鸞」朱文方印・連印、「含章」朱文長方印・関防印、「解頤」白文長方印・遊印
賛「條風百草一齊花　朵朵分明剪綺霞　也識東君鍾愛甚　送春偏到粉候家　低飛無力舞僂僂 奈此春光駘蕩何　誰氏窈娘吮彫管　也應依樣畫睂羸　故臺芳草罩烟霏　萬古青陵事已非 愛箇貞魂吹（不）散　春風隨處作團飛」
個人蔵

文政 5 年（1822）9 月 9 日に出発した西遊の旅の途中で立ち寄った備後の三原（広島県三原市）で、さる好事家（蝶夢老）のために描いた双幅です。星巖の《雪棧図》は、垂直に切り立った岩肌に取り付く蜀（四川省成都市付近）の棧道を行く旅人と従者を描いています。入り組んだ奇怪な山々の間に、わずかに点じられた彩色が鮮やかです。紅蘭の《群蝶図》には色とりどりの 20 匹の蝶が描かれています。それらの多くは飛翔というより静止した態で、紅蘭は美しい羽の模様を描き分けることに意を集中しているようです。モチーフは依頼者の号に因んだものと思われます。紅蘭 21 歳の作。(N)

No.19-2

せつさん ず
雪棧図

やながわせいがん
梁川星巖（1789-1858）

文政 7 年（1824）2 月 10 日
絹本墨画淡彩
1 幅
126.5 × 42.3cm
款記「文政甲申花朝前五日　浩蕩鷗史梁卯詩畫於三原僦居落 梅多處　時黃鳥一聲晴日滿簾」
印章「梁卯印」白文方印、「伯兔人」朱文方印、「星巖」白文長方印、「□□」白文長方印・関防印、「鷗波」白文長方印・遊印
賛「東村西村春有無　梅花欲老白模糊　香風吹雪上客榻　興 来為此雪棧圖　連峰去天不盈尺　長棧帶雪光絡繹　馬影 凌兢何為者　定知遠道疲行役　噫吁戲危乎高哉　蜀道之 難々於上青天　誰其言之李謫仙　古來嶮巖乃爾々　况復 值此風雪寒　圖成自笑還自哭　我亦年來踪牢落　十踰函 關七渡河　髻綴冰珠脚跼蹐　何似山中伴山翁　尊前占瑞 話年豐　何當歸来茅屋裏　爛醉高歌拆掌重與看此白玲瓏」
個人蔵



張（梁川）紅蘭《群蝶図》



梁川星巖《雪棧図》

No.20

かいどう ず せんめん
海棠図扇面

ちょう やながわ こうらん
張（梁川）紅蘭（1804-79）

19 世紀

紙本墨画

1 幅

46.7 × 14.4cm

款記「閨窓人静夜風清 春到海棠殊有（情）
一笑貧居出無燭 倩他明月照庭行
紅蘭」

印章「碧玉」白文橢円印、
「紅蘭」白文長方印・遊印



水墨の濃淡で描かれた海棠の一枝に自作の七言絶句を添えたもの。詩は「春の静かな夜更けに月明かりをたよりに庭の海棠のもとへ行こう」といった内容です。なお「情」は『紅蘭小集』巻二所載の同詩によって補いました。モノクロームの画面の中で「碧玉」と「紅蘭」の印章の朱が画面に艶やかさを生み出しています。上部の銀砂子はかつて扇面に仕立てられていた時に蒔かれたものかもしれません。(N)

No.21

ぼくちく ず すいせいじょう
墨竹図（『翠静帖』より）

ちょう やながわ こうらん
張（梁川）紅蘭（1804-79）

19 世紀

絹本墨画

3 帖

14.3 × 14.7cm

款記「誰見此君能勁直 山中八月別成春 紅蘭張氏」

印章「紅」「蘭」白文方印・連印



『翠静帖』に載る他の作品の年紀が嘉永元年から4年（1848-51）なので、本図もほぼその頃（紅蘭 45～8 歳頃）の京都時代の作と推定されます。賛は自作の絶句から2句を引用し、「強くまっすぐな此君（竹）が8月の山中で春のような緑をしているのを、いったい誰が見出すであろうか」と詠んでいます。『翠静帖』全3帖のうちの第1帖の2図目に、下田歌子と同郷の儒者・佐藤一斎（1772-1859）の七言絶句と見開きになるように貼られています。(N)

第3章

近代の女性南画家たち

明治維新により新しい価値観が流入し、女性が専門的な画家となることが少しずつ可能になった近代以降、女性画家の数は飛躍的に増えていきました。ここではその先駆的な存在であった奥原晴湖や野口小蘋をはじめ、大阪で活躍した河邊青蘭、結婚後図画教師として筆を揮った都鳥雪香ら、南画を得意とした画家たちの制作を紹介します。(T)

No.22

かいどうしょうきん ず
海棠小禽図

のぐちしょうひん
野口小蘋（1847-1917）

明治 43 年（1910）

絹本着色

1 幅

143.3 × 70.8cm

款記「明治庚戌首夏小蘋女史」

印章「塾親之印」白文方印、「小蘋女史」朱文方印

満開の花をつけた海棠の枝で、羽をやすめる2羽の綬帯鳥。上方には3羽、白頭翁が優雅に舞っています。海棠は「棠」の字が「堂」と同音であることから「堂上」、すなわち父母を、また白頭翁は頭が白いことを白髪になぞらえて長寿を意味し、さらに本作では万代や繁栄を意味する綬帯鳥が組み合わされています。おそらくは父母の長寿と繁栄を願う図として描かれたものと考えられます。

本作を描いた野口小蘋は、明治・大正期に活躍した女性南画家。宮家とも関わりが深く、東伏見宮妃や小松宮妃などの絵画指導を務めました。さらに明治37年（1904）には女性初の帝室技芸員にも選ばれ、大正天皇の御大典の折には《悠紀地方風俗歌屏風》の揮毫を拝命しました。(T)



No.23

かちょうず
花鳥図

とりせっこう
都鳥雪香（1873-？）

19世紀末～20世紀

絹本着色

1幅

141.6 × 54.7cm

款記「雪香女史」

印章「雪香」朱文長方印

大輪の花を咲かせた芥子を背景に、雌雄の鶏にひよこが3羽描かれています。眼光鋭く威容を誇る雄鶏に対し、雌鶏やひよこたちは食事に余念がないようです。「鶏」という字は「慶」と同音であることから、雌雄の鶏とその雛を描いて一家の和楽を意味する「闔家全慶」という画題があり、本作もその一例と考えられます。

都鳥雪香は野口小蘋に絵を学び、日本画会や日本美術協会の展覧会へ出品した画家です。夫は洋画家の都鳥英喜（1873-1943）。雪香は明治35年（1902）に京都へ移り、私立精華高等女学校や私立同志社女学校にて図画教員として教鞭を執りました。(T)



No.24

こうとうしゆんしよくず
江頭春色図

おくはらせいこ
奥原晴湖（1837-1913）

19世紀末～20世紀初期

絹本着色

1幅

129.7 × 50.3cm

款記「門外青山緑水喜 推窓満目物華賒 飄然冒曉命吟杖 擬訪詩朋兼看花 晴湖詩畫」

印章「静古」白文方印、「星古」白文方印、「心無機事案有好書」朱文方印・遊印

霞ただよう春の水辺。芽吹きだした若い緑や薄紅色の花をつけた木々が清新な空気を感じさせ、画面下方には杖を突いた高士と侍童が連れ立って歩く姿が描かれます。添えられた七言絶句には、「外では青い山と緑色にきらめく水面とが春を謳い、窓を押し開ければ遙か遠くまで素晴らしい景色が続いている。夜が明けるのも待ち遠しく杖を手に出かけ、詩友を訪ねて花見を楽しみたいと思う」といった内容が詠われています。

奥原晴湖は幕末から明治期にかけて活躍した画家。木戸孝允（1833-77）らに愛好され名声を博し、晩年は埼玉県熊谷に隠棲して旺盛な制作活動を行いました。(T)



No.25

たいのういえんず
態濃意遠図

かわべせいらん
河邊青蘭（1868-1931）

明治22年（1889）

絹本着色

1幅

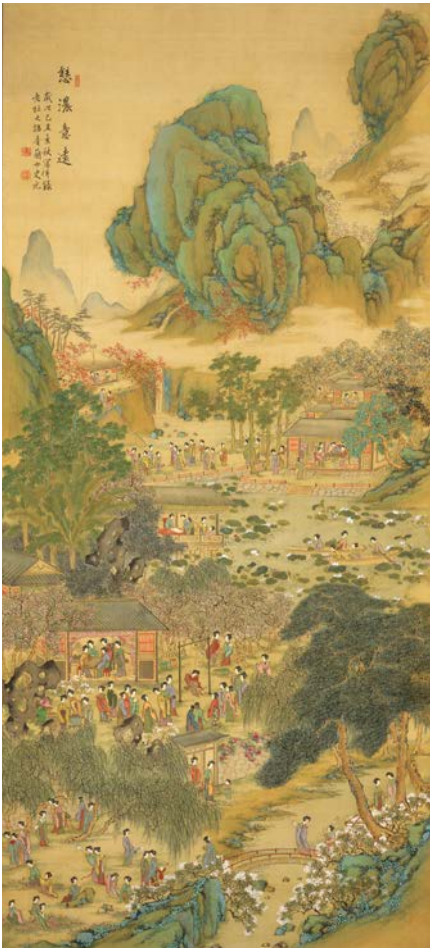
154.1 × 70.7cm

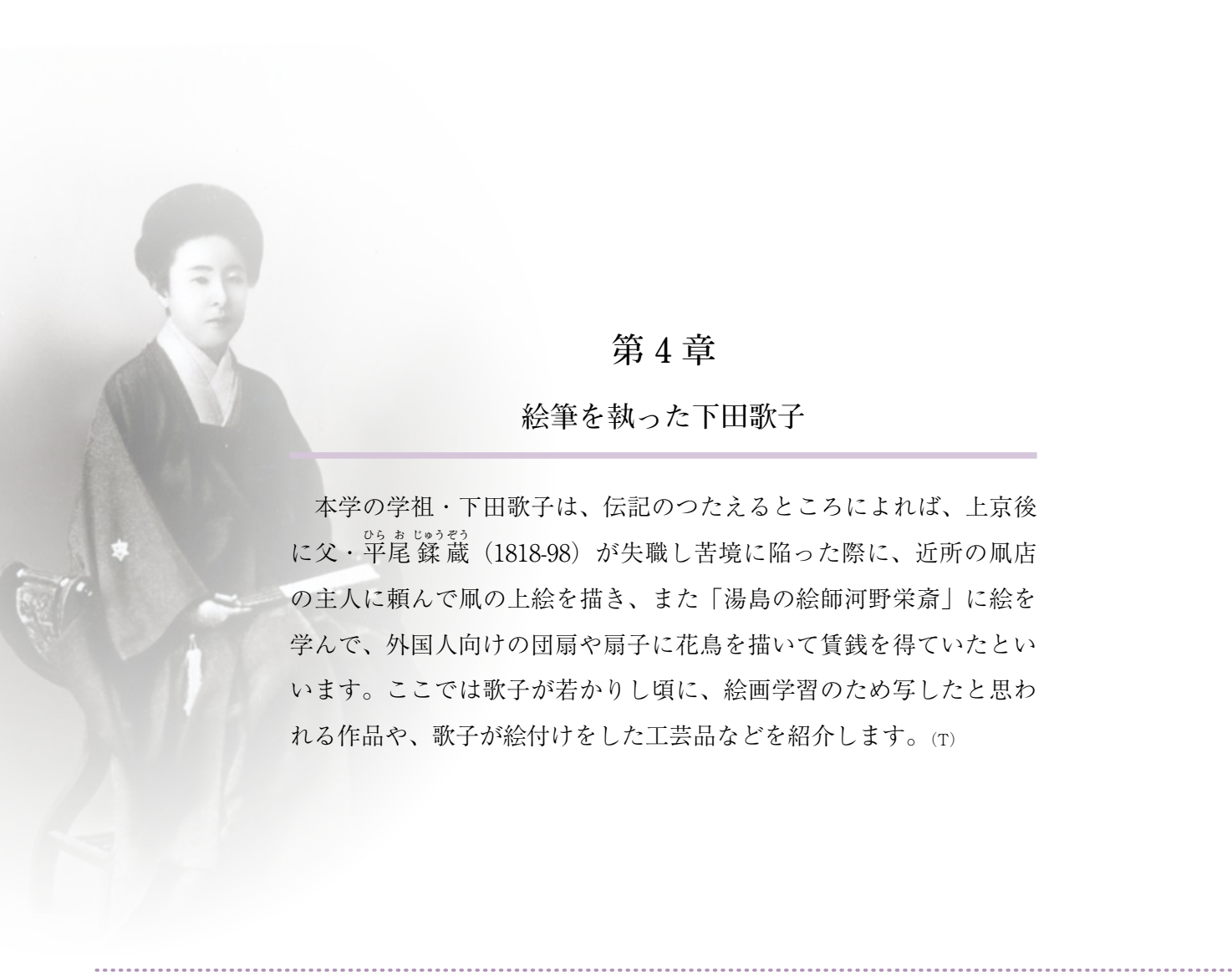
款記「歳次己丑素秋 寫併録老杜之語 青蘭女史元」

印章「河邊元印」白文方印、「青蘭女史」朱文方印、「貴適意」白文長方印・関防印

「態濃意遠」とは、容姿が美しく心が気高いといった意味。春の長安で水辺に行楽する楊貴妃の姉一行を詠んだ唐の詩人・杜甫の長詩「麗人行」に由来します。本作ではその詩に着想を得つつ、高く聳える山の麓で、水辺に憩う仕女たちの姿が描かれています。

河邊青蘭は明治から昭和の初めにかけて、大阪で活動した女性画家。橋本青江（1828-？）に絵を学び、明治期には東京の野口小蘋と並び称される存在でした。青蘭が22歳のときに描いた本作は、師である青江が嫌って描かなかった濃彩の青緑山水に挑戦した、意欲的な作品であるといえます。(T)





第 4 章

絵筆を執った下田歌子

本学の学祖・下田歌子は、伝記のつたえるところによれば、上京後に父・平尾 録 蔵（1818-98）が失職し苦境に陥った際に、近所の風店の主人に頼んで風の上絵を描き、また「湯島の絵師河野栄斎」に絵を学んで、外国人向けの団扇や扇子に花鳥を描いて賃銭を得ていたといっています。ここでは歌子が若かりし頃に、絵画学習のため写したと思われる作品や、歌子が絵付けをした工芸品などを紹介します。(T)

No.26

にしき え う つ し え ど め い し ょ し き な が め す み だ が わ せ っ ち ゅ う ず
錦 絵 写 江戸名所四季の眺 隅田川雪中図

しも だ う た こ
下田歌子（1854-1936）

明治初期
紙本着色
3 枚続
右：39.7 × 27.7cm
中：39.5 × 27.7cm
左：37.3 × 27.7cm
実践女子大学図書館蔵



江戸時代の浮世絵師・歌川広重（1797-1858）の《江戸名所四季の眺 隅田川雪中図》を、歌子が模写して描いたと思われる作品。前景に描かれた3人の女性たちは、輪郭を正確に写し取り、顔も丁寧に彩色がされていますが、着衣の模様など一部が変更されています。また背景もところどころに省略や簡略化が見られ、もともとなる作品を写しながらも、歌子のアレンジが加えられた創作性の強い作品となっています。(T)

No.27

ら く や き こ ざ ら
楽焼小皿

しも だ う た こ
下田歌子（1854-1936）下絵付

昭和初期
陶器
5 枚
各約 9.3 × 9.4 × 1.8cm
実践女子大学図書館蔵



昭和初期に下田歌子が熱海にて下絵付をしたと伝わる楽焼の小皿。松竹梅というおめでたいモチーフに、海上の鳥影、さらにはカモメでしょうか、群れ飛ぶ鳥の姿が描かれています。歌子はしばしば熱海を訪れていたようで、熱海から東京の知人へ出した書簡が数通、本学図書館に収められています。(T)

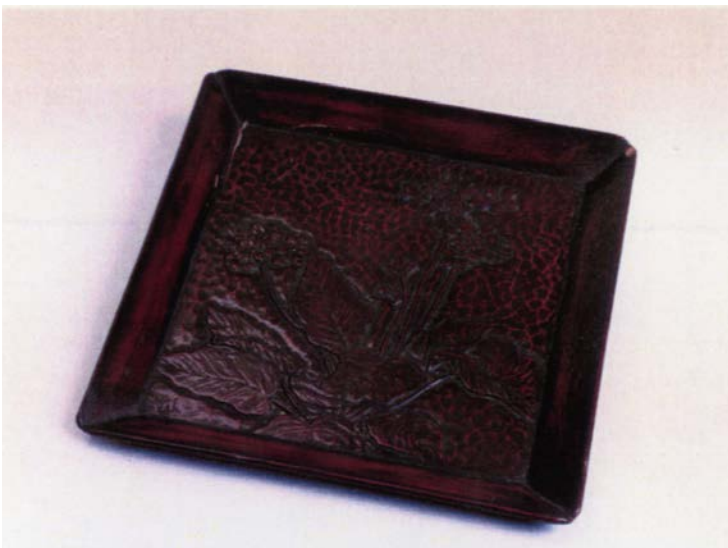
No.28

か ま く ら ぼ り さ く ら そ う ず し ょ う か く ぼ ん
鎌倉彫桜草図小角盆

しも だ う た こ
下田歌子（1854-1936）下絵

ひ ら お か ず こ
平尾寿子（1904?-86）彫

20 世紀前半
木彫漆塗
1 個
21.0 × 21.0 × 2.0cm
実践女子大学図書館蔵



下田歌子が下絵を描き、姪の平尾寿子が制作したと伝わる鎌倉彫の角盆。寿子は歌子の没後に実践女学校理事長となった人で、歌子の遺言によりその財産一切を譲り受け、恩賜品や蔵書、衣類などを本学に寄贈しました。また、寿子は昭和 17 年（1942）に著した『下田歌子回想録』のなかで、「文章をよくし、演説をよくする先生は、同時に書を、絵をよくしました。和洋の音楽を語り、動植物学を語り」と、歌子の多芸多才ぶりを紹介しています。(T)



清く雅やかな世界を求めて
—江戸時代後期の女性画家たち—
解説パンフレット

発行日：令和3年（2021）9月20日
令和3年（2021）10月19日 第3版
編集・印刷・発行：実践女子大学香雪記念資料館
〒150-8538 東京都渋谷区東1-1-49
TEL 03-6450-6805
H P <https://www.jissen.ac.jp/kosetsu/>

